

2006 年度統計力学 II 宿題 12 (7 月 5 日出題、12 日提出) 解答

担当 吉森 明

[問題 1.] (1) P185 演習問題 [4]

(2) $f(M) = A_0 + A_2 M^2 + A_4 M^4$ で、 A_2 が正の場合と負の場合に、 $f(M)$ を最小にする M_0 と $f(M_0)$ をすべて求めよ

[訂正](2) で、 $A_4 > 0$ です。またやってしましました。申し分けありません。

[解答] (1) 授業にならって 3 つの手順で解く。

[手順 1] まず、問題のハミルトニアンで、 σ_1 以外のスピンを $\langle \sigma \rangle$ に置きかえる。置き換えたハミルトニアンを H_A とすると、

$$H_A = -zJ\langle \sigma \rangle \sigma_1 + C \quad (1)$$

C は、 σ_1 によらない定数を表す。

[手順 2] 次に、この H_A を使って $\langle \sigma_1 \rangle$ を計算する。カノニカル分布を使って、

$$\langle \sigma_1 \rangle = \frac{\sum_{\sigma_1=-1,0,1} \sigma_1 e^{\beta z J \langle \sigma \rangle \sigma_1}}{\sum_{\sigma_1=-1,0,1} e^{\beta z J \langle \sigma \rangle \sigma_1}} \quad (2)$$

$$= \frac{e^{\beta z J \langle \sigma \rangle} - e^{-\beta z J \langle \sigma \rangle}}{e^{\beta z J \langle \sigma \rangle} + 1 + e^{-\beta z J \langle \sigma \rangle}} \quad (3)$$

ここで、 $\langle \sigma_1 \rangle = \langle \sigma \rangle$ とすると、

$$\langle \sigma \rangle = \frac{e^{\beta z J \langle \sigma \rangle} - e^{-\beta z J \langle \sigma \rangle}}{e^{\beta z J \langle \sigma \rangle} + 1 + e^{-\beta z J \langle \sigma \rangle}} \quad (4)$$

この非線型方程式の解が実現する $\langle \sigma \rangle$ となる。

[手順 3](4) 式の解の個数を温度を変えて調べる。

$$f(M) = \frac{e^{\beta z JM} - e^{-\beta z JM}}{e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM}} - M \quad (5)$$

とおくと、 $f(M) = 0$ を満たす M が $\langle \sigma \rangle$ になる。

$f'(0) \leq 0$ の時、解は $M = 0$ しかなく、 $f'(0) > 0$ の時、 $M \neq 0$ の解がある（後で説明）。したがって、

$$f'(M) = \frac{\beta z J e^{\beta z JM} + \beta z J e^{-\beta z JM}}{(e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM})} - \frac{(e^{\beta z JM} - e^{-\beta z JM})(\beta z J e^{\beta z JM} - \beta z J e^{-\beta z JM})}{(e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM})^2} - 1 \quad (6)$$

だから、

$$f'(0) = \frac{\beta z J + \beta z J}{(1 + 1 + 1)} - 1 = \frac{2\beta z J}{3} - 1 \quad (7)$$

転移温度 T_c は、

$$\frac{2zJ}{3k_B T_c} = 1 \quad (8)$$

なので、

$$T_c = \frac{2zJ}{3k_B} \quad (9)$$

$f'(0) \leq 0$ の時、解は $M = 0$ しかなく、 $f'(0) > 0$ の時、 $M \neq 0$ の解があること。（6）式を通分すると、

$$f'(M) = \frac{\beta z J}{(e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM})^2} \{ (e^{\beta z JM} + e^{-\beta z JM})(e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM}) - (e^{\beta z JM} - e^{-\beta z JM})(e^{\beta z JM} - e^{-\beta z JM}) \} - 1 \quad (10)$$

$$= \frac{\beta z J}{(e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM})^2} \times \{ (e^{\beta z JM} + e^{-\beta z JM})^2 + (e^{\beta z JM} + e^{-\beta z JM}) - (e^{\beta z JM} - e^{-\beta z JM})^2 \} - 1 \quad (11)$$

$$= \frac{\beta z J}{(e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM})^2} \{ 2 + (e^{\beta z JM} + e^{-\beta z JM}) + 2 \} - 1 \quad (12)$$

$$= \frac{\beta z J (4 + e^{\beta z JM} + e^{-\beta z JM})}{(e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM})^2} - 1 \quad (13)$$

$$= \frac{1}{(e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM})^2} \{ \beta z J (4 + e^{\beta z JM} + e^{-\beta z JM}) - (e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM})^2 \} \quad (14)$$

$g(M) = f'(M)(e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM})^2$ とすると、

$$\begin{aligned} g(M) &= \beta z J (4 + e^{\beta z JM} + e^{-\beta z JM}) \\ &\quad - (e^{\beta z JM} + 1 + e^{-\beta z JM})^2 \end{aligned} \quad (15)$$

$X = e^{\beta z JM} + e^{-\beta z JM}$ とすると、

$$g(M) = \beta z J (4 + X) - (1 + X)^2 \quad (16)$$

$$= -X^2 + (\beta z J - 2)X + 4\beta z J - 1 \quad (17)$$

これは、 X について上に凸の放物線を表す。 $M = 0$ で、 $X = 2$ だから、(16) 式から、 $g(0) = 6\beta z J - 9$

① $g(0) = 6\beta z J - 9 \leq 0 (\beta z J \leq 3/2)$ の時

$$\frac{\partial g}{\partial X} = -2X + (\beta z J - 2) \quad (18)$$

$\beta z J \leq 3/2$ だから、 $\beta z J - 2 < 0$ となり、 $X > 2$ で、

$$\frac{\partial g}{\partial X} < 0 \quad (19)$$

$g(0) < 0$ だから、 $g(M) < 0$ となることがわかる。したがって、増減表は

M	0		∞
$g(M)$	—	—	$-\infty$
$f'(M)$	—	—	$-\infty$
$f(M)$	0	減少	$-\infty$

つまり、 $M > 0$ で、 $f(M) < 0$ となり、 $f(M) = 0$ となるのは、 $M = 0$ の1つしかない。

② $g(0) = 6\beta z J - 9 > 0 (\beta z J > 3/2)$ の時

$M \rightarrow \infty$ で $g(M) \rightarrow -\infty$ だから、 $M > 0$ 、つまり、 $X > 2$ で、 $g(M) = 0$ となる解が1つはある。それを、 M_0 とすると、増減表は、

M	0		M_0		∞
$g(M)$	+	+	0	-	$-\infty$
$f'(M)$	+	+	0	-	$-\infty$
$f(M)$	0	増加		減少	$-\infty$

つまり、少なくとも $M < M_0$ で、 $f(M) > 0$ なので、 $M = 0$ 以外に $f(M) = 0$ を満たす M がある。

(2) $f(M)$ の増減を調べるために、微分をとると

$$f'(M) = 2A_2M + 4A_4M^3 = M(2A_2 + 4A_4M^2) \quad (20)$$

① $A_2 > 0$ の時:

常に $2A_2 + 4A_4M^2 > 0$ だから

M		0	
$f'(M)$	-	0	+
$f(M)$	減少	A_0	増加

したがって、 $M = 0$ が唯一の極小で、最小。その値は、 $f(0) = A_0$ となる。

② $A_2 < 0$ の時:

$$M_0 = \sqrt{\frac{-A_2}{2A_4}} \quad (21)$$

とすると $|M| > M_0$ のとき、 $2A_2 + 4A_4M^2 > 0$ となり、 $|M| < M_0$ のとき、 $2A_2 + 4A_4M^2 < 0$ だから、

M		$-M_0$		0		M_0	
$f'(M)$	-	0	+	0	-	0	+
$f(M)$	減少		増加		減少		増加

したがって、 $M = 0$ は極小で、最小は $M = \pm M_0$ になる。関数の値は、

M_0 を代入して

$$f(M_0) = A_0 + A_2 \left(\frac{-A_2}{2A_4} \right) + A_4 \left(\frac{-A_2}{2A_4} \right)^2 \quad (22)$$

$$= A_0 - \frac{A_2^2}{2A_4} + \frac{A_2^2}{4A_4} \quad (23)$$

$$= A_0 - \frac{A_2^2}{4A_4} \quad (24)$$

[問題 2.] 教科書 p185、演習問題 [3]

[解答] (1) H を

$$H = -J\sigma_0(\sigma_1 + \sigma_2 + \sigma_3) - h(\sigma_1 + \sigma_2 + \sigma_3) \quad (25)$$

とすると、この H のカノニカル分布で $\langle \sigma_0 \rangle$ を計算する。

$$\langle \sigma_0 \rangle = \frac{1}{Z} \sum_{\sigma_0=-1,1} \sum_{\sigma_1=-1,1} \sum_{\sigma_2=-1,1} \sum_{\sigma_3=-1,1} \sigma_0 e^{-\beta H} \quad (26)$$

ここで

$$Z = \sum_{\sigma_0=-1,1} \sum_{\sigma_1=-1,1} \sum_{\sigma_2=-1,1} \sum_{\sigma_3=-1,1} e^{-\beta H} \quad (27)$$

H を代入して、

$$\begin{aligned} \langle \sigma_0 \rangle &= \frac{1}{Z} \sum_{\sigma_0=-1,1} \sum_{\sigma_1=-1,1} \sum_{\sigma_2=-1,1} \sum_{\sigma_3=-1,1} \sigma_0 \exp[-\beta \{-J\sigma_0(\sigma_1 + \sigma_2 + \sigma_3) \\ &\quad - h(\sigma_1 + \sigma_2 + \sigma_3)\}] \end{aligned} \quad (28)$$

σ_0 について和を取ると、

$$\begin{aligned} &= \frac{1}{Z} \sum_{\sigma_1=-1,1} \sum_{\sigma_2=-1,1} \sum_{\sigma_3=-1,1} \left[e^{-\beta \{-J(\sigma_1 + \sigma_2 + \sigma_3) - h(\sigma_1 + \sigma_2 + \sigma_3)\}} \right. \\ &\quad \left. - e^{-\beta \{J(\sigma_1 + \sigma_2 + \sigma_3) - h(\sigma_1 + \sigma_2 + \sigma_3)\}} \right] \end{aligned} \quad (29)$$

$$= \frac{1}{Z} \sum_{\sigma_1=-1,1} \sum_{\sigma_2=-1,1} \sum_{\sigma_3=-1,1} \left[\prod_{i=1}^3 e^{\beta(J+h)\sigma_i} - \prod_{i=1}^3 e^{-\beta(J-h)\sigma_i} \right] \quad (30)$$

$\sigma_1, \sigma_2, \sigma_3$ は、互いに独立なので、

$$\langle \sigma_0 \rangle = \frac{1}{Z} \left[\left(\sum_{\sigma=-1,1} e^{\beta(J+h)\sigma} \right)^3 - \left(\sum_{\sigma=-1,1} e^{-\beta(J-h)\sigma} \right)^3 \right] \quad (31)$$

$$= \frac{1}{Z} [Z_+ - Z_-] \quad (32)$$

ここで、

$$Z_+ = (e^{\beta(J+h)} + e^{-\beta(J+h)})^3 = (2 \cosh \beta(J+h))^3 \quad (33)$$

$$Z_- = (e^{-\beta(J-h)} + e^{\beta(J-h)})^3 = (2 \cosh \beta(J-h))^3 \quad (34)$$

また、 Z も同様に

$$Z = Z_+ + Z_- \quad (35)$$

ゆえに、

$$\langle \sigma_0 \rangle = \frac{Z_+ - Z_-}{Z_+ + Z_-} \quad (36)$$

(2) 次の公式を使う。

$$-\beta \langle \frac{\partial H}{\partial h} \rangle = \frac{1}{Z} \frac{\partial Z}{\partial h} \quad (37)$$

証明は各自すること。

H は、(25) 式で与えられているので、

$$\frac{\partial H}{\partial h} = -(\sigma_1 + \sigma_2 + \sigma_3) \quad (38)$$

したがって、

$$\langle \sigma \rangle = \frac{k_B T}{3Z} \frac{\partial Z}{\partial h} \quad (39)$$

$Z = Z_+ + Z_-$ だから、(33) 式と (34) 式を使って、

$$\langle \sigma \rangle = \frac{k_B T}{3(Z_+ + Z_-)} \left(\frac{\partial Z_+}{\partial h} + \frac{\partial Z_-}{\partial h} \right) \quad (40)$$

$$= \frac{k_B T}{3(Z_+ + Z_-)} \left\{ \frac{\partial}{\partial h} (2 \cosh \beta(J+h))^3 + \frac{\partial}{\partial h} (2 \cosh \beta(J-h))^3 \right\} \quad (41)$$

$$= \frac{1}{Z_+ + Z_-} \left\{ 2 \sinh \beta(J+h) (2 \cosh \beta(J+h))^2 + 2 \sinh \beta(J-h) (2 \cosh \beta(J-h))^2 \right\} \quad (42)$$

$$= \frac{1}{Z_+ + Z_-} \{ Z_+ \tanh \beta(J+h) + Z_- \tanh \beta(J-h) \} \quad (43)$$

(3) 教科書 P224 の変形で導ける。

(4) h は、平均場近似の時の、 JM に対応する。したがって、 T_c で、 $h = 0$ から、 $h \neq 0$ になる。

T_c を求めるには、

$$\beta h = \ln \frac{\cosh \beta(h+J)}{\cosh \beta(h-J)} \quad (44)$$

を h について解かなければならぬ。今、関数 $f(h)$ を

$$f(h) = \ln \frac{\cosh \beta(h+J)}{\cosh \beta(h-J)} - \beta h \quad (45)$$

とすると、 $f(0) = 0$ 、 $f(\infty) = -\infty$ となる。

$f(h)$ の増減を調べるために微分をすると、

$$f'(h) = \frac{\partial}{\partial h} \{ \ln \cosh \beta(h+J) - \ln \cosh \beta(h-J) \} - \beta \quad (46)$$

$$= \beta \tanh \beta(h+J) - \beta \tanh \beta(h-J) - \beta \quad (47)$$

$$f''(h) = \beta^2 \operatorname{sech}^2 \beta(h+J) - \beta^2 \operatorname{sech}^2 \beta(h-J) \quad (48)$$

双曲線関数 $\operatorname{sech}^2 x$ は、 $x > 0$ で減少関数だから、 $J > 0$ であれば、 $h > 0$ で $\beta^2 \operatorname{sech}^2 \beta(h+J) < \beta^2 \operatorname{sech}^2 \beta h$ が言えるので、

$$f''(h) < \beta^2 \operatorname{sech}^2 \beta h - \beta^2 \operatorname{sech}^2 \beta(h-J) < 0 \quad (49)$$

これは、 $h > 0$ で $f'(h)$ が単純減少になることを示している。一方、

$$f'(0) = 2\beta \tanh \beta J - \beta \quad (50)$$

$f'(\infty) = -\beta$ だから、 $f'(0) > 0$ の時だけ、 $h > 0$ で $f'(h) = 0$ の解が 1 つある。 $f'(0) < 0$ の時は、 $f'(h) < 0$ となり、 $f'(h)$ は 0 にならない。

以上のことから、 $f'(0) > 0$ の時、 $f(h)$ は、 $h > 0$ に極値を 1 つだけ持ち、その時の $f(h)$ は、正なので、 $f(\infty) < 0$ から、この場合は、 $h > 0$ に、 $f(h) = 0$ の解を 1 つだけ持つ。 $f(h)$ は、奇関数なので、 $h < 0$ にもう 1 つ解を持ち、さらに $h = 0$ も解なので、全部で 3 つあることになる。一方、 $f'(0) < 0$ の時は、 $f(h)$ は単純減少で、 $f(0) = 0$ なので、 $f(h) = 0$ の解は、 $h = 0$ の 1 つしかない。 (50) 式から、 $2 \tanh \beta J > 1$ で、 $h \neq 0$ となる解があらわれることになる。つまり、 $2 \tanh(J/k_B T_c) = 1$ から T_c が求まる。